

としての ベーグル、森、

もちるん僕は、パン屋になりたかった訳ではない。けども、特に何かになりたかった訳でもなかった。だからパン屋みたいなモノになっているのだろうか。料理をすることは、嫌いじゃない。だけど、誰かに食べさせたいと思っただこともなかった。

パンを焼き始めたのは何故だったのか。多分、単なる暇潰しだったと思う。白っぽい粉と水を捏ねて、丸めて焼くとふわっとした食べ物になるのが不思議で、別の日に同じことをしても同じパンができないことが面白くて、立て続けに何度か焼いた。焼き上がったパンが大きな皿に山積みになって、自分だけでは食べ切れなくて友人に配った。「旨い」、「また分けてくれ」と言われて、調子に乗ったつもりではないけれど、材料費ぐらいいはもらっても良いかな、と思った。

注文を受け、パンを焼いて、配達し、お金を貰う。このサイクルが何人かの知人と結ばれると、ここ最近の僕の生活の基準がパンを焼くことに依存される。僕は、このままパン屋になっていくのか。むしろ、きつと僕のお客たちは、僕のことを「パン屋」だと思っている。自分が何者かということは、自分より先に他人が決めてしまうものなのかもしれない。

パンの配達が面倒になると、いつもこんな風に取り留めも無い事を考えてしまう。

今日は、ベーグルを二十四個持って家を出た。電車で揺られながら、インターネットの地図で見ておいたカスケ駅からの三十分ほどの道程を頭に思い浮かべた。

駅前のロータリーに人は全然いない。看板やバス停の屋根やベンチは、一様に陽焼けして淡い色調に統一されていた。コンクリートの敷石はどこどころ隆起して、割れ目からエノコログサが生えている。線路沿いの駅前商店街―といっても埃っぽい本屋とそのほか何を売っているか分からないような店が数軒程度しかない―を抜けると、オオイヌノフグリとヒメオドリコソウの空き地。その先に麦畑と僕よりも背の高いトウモロコシの畑が広がっている。更に向こうにカスケの森が見える。森を抜けた先が本日の配達先だ。汗を拭くタオルをバッグから取り出して顔を上げた僕は、地図を見て想像していたよりも暗く大きな森にちよっと怖じ気づいてしまった。だけど、森の外側を迂回するとどれだけ歩かなくちゃならないのか僕には分からない。

木陰が幾重にもなって暗幕を作る。夏休みの学校の理科室辺りの廊下の暗さっていうのは、確かこんなだった。外の賑やかな太陽光との極端な差の所為で、当時の僕は、邪悪な闇を錯覚して見ていた。ここでは、時たまぼつかりと森の闇の屋根に穴が開いて空き地のような光の庭になっているところがある。そこだけ太陽の光が燦々と降り注いでいるから僕の腰丈ぐらいのイネ科の雑草とイヌタデとか、ちまちまとしたピンク色の花をつけた草がびっしりと生えている。そのたつた一坪ぐらいの土地にモンシロチョウが十数羽ひらひらとやっっている。蝶たちの力のない飛び方が鬼気迫っているようにも見えてきて僕まで疲れてきてしまう。きつとモンシロチョウたちは、そこが檻だつてことに気づいていると思う。暗さの方に視線を戻すと眼の奥に緑の閃光のストライプが点る闇だつた。そして段々とモノクロームから色が戻ってくる。その途中で道祖神を見つけた。本当は、道祖神じゃなくて、むっくりとしたベージュの花崗岩だつた。けれども、僕は、旅の無事を祈ってその花崗岩にベーグルをお供えした。

自分で言うのもなんだけど、僕のベーグルはおいしいと思う。だけど、僕の友人たちが本当に「旨い」と思ってくれているのかは、分からない。パンは、値段が高いものではないから、今まで何をやっているのか分からないフワフワと半透明な奴がやつと実体のある社会活動を始めたと思つて、そこに定着させるためのご祝儀風の足枷として注文しているのかもしれない。僕は、ベーグルを一つ取り出して、穴の中に宇井さんの顔を思い浮かべて、「人の気持ちは分からないなあ。」と独り言を言ってみた。

明瞭だった小径が少し分かり辛くなってきた。様々な種類の木々がほぼ等間隔に生えているから木と木の間がどこも道に見える。僕は、顔の高さぐらいにある調度良い小枝の横を通る度にベーグルの穴をそこに引っ掛けていった。梟の鳴き声が聞こえる。まだ森の反対側は見えない。

僕は、僕がすっかり鼻歌を歌っていないことに気づいた。改めてこの森の外側のことを考える。

僕のお客たちは、注文する時には大抵、「パンをお願いします」と言うだけで、どんなパンをいくつとはオーダーしない。皆は多分、僕が普通のパン屋みたいに色んなパンを焼けないと思つている。僕は、どんなパンだつて作れる自信はあるけど、無用に手を広げても仕方がないのだ。だから僕はいつもベーグルを焼く。今日のお客は、二人暮らし。一年程前まで僕の親友の恋人だった宇井さんは、別の男の人とカスケの森の側で暮らしている。宇井さんが注文してくれ

森の入り口に立った僕は、前後、左右、上下をぐるりと見回した。左右には、暗い森が刑務所の壁のように続いている。後ろは、トウモロコシ畑のもと来た道。配達しないで戻る訳はない。薄雲の掛かった空には、僕のベーグルを狙っているのか鶯が出来る良い紙飛行機のように旋回しながら滑降のチャンスを探っている。前方には、暗い森の奥へと続く確かな踏み跡がついている。足下では、蟻たちが森を出入りしている。森の境目を気にしていない様子の蟻たちを見たら、この奥には、僕を脅かすものは何もないような気がしてきた。森の中心を真っ直ぐに進むことができれば、向こう側にはじきに辿り着けるだろう。念のため、帰りに暗くなつても、出口を間違わないように森の入り口に目印を置くことにした。僕は、手提げの紙袋からベーグルを一つ取り出して、スタジイの小枝にベーグルの穴を引っ掛けた。鶯に気づかれないように大きなヤツデの葉っぱを傘にした。

森の中は、直射日光を避けられる分だけ涼しい。アスファルトの照り返しで火照つてオレンジ色になっていた僕の肌が直ぐにペパーミントグリーンになった。森の奥へと続く明瞭な小径は、一步一步進む度にふかふかと柔らかさを増していく。パン作りに使われる「天然酵母」の一種は、こんな森の腐葉土の中に棲んでいるらしい。それをどうにかして取り出して使い易いように作られている。僕がパンに使っているのは、「自然発酵母」。僕の家にも棲んでる何かと水と小麦粉を混ぜたらふつふつと泡が生まれていた。それを瓶詰めにして冷蔵庫の奥に置いていて、毎日何かと捏ね混ぜて、そして匂いを嗅いでいる。毎日少し違う匂いがある。臭い匂いの時もあつて、そんな時は、呪文を唱えながら丁寧に混ぜる。生きものなのだなあ、と思う。奴らの生き死には、僕の匙加減次第なのだ。

鼻歌まじりに森を進んで行くと分かれ道にさしかかった。どちらも疑いようなない道だからどっちへ行つてもきつと同じところへ繋がるのだろう。僕は、何となく左へ進むことにした。一応、ベーグルを一つ腰掛けに調度良さそうな岩の上に置く。寝かせて置いても目立たないから設置の仕方は、工夫した。

関東の低地の森や雑木林は、たいてい鬱蒼としていて清涼感に欠ける。カスケの森も例に漏れず、湿度の高い空気がナメクジみたいにじつとりと動く。湿気を含んだ青黒緑の葉のスタジイや楠木が密集している。北の涼しい地方や高地であれば、爽やかな木漏れ日を内包するはずのコナラや紅葉もここでは、葉深く汗を滲ませていそうだ。ヤブガラシに纏わり憑かれたツツジは、もこもことした着ぐるみの熊が疲れ果てて地面に寝てしまう寸前の様。実を沢山つけた枇杷の木が生えている。一つ摘もうかと思つたけれども、よく見てみると、僕が手を伸ばせば届きそうな実はどれも蟻に先を越されていた。僕の鼻歌は、止まらかけた。

たのは、今回が初めてだ。電話口の宇井さんは、ちよつと笑いを堪えているみたいだった。宇井さんと男の人は、二人で一日四個のベーグルを食べるかもしれない。三日分だと十二個だ。誰かが訪ねてきた用にあと四個で、十六個ぐらい渡せば良いかな、と勝手に計算をした。大体、頼まれもしないのにベーグル二十四個だなんてかえつて迷惑に達しない。

ベーグル、ベーグルと誰かが言った。テーブル、テーブルだったかな。振り返ると暗い森にベーグルが点々とぶら下がっている。蛙の卵みたいなコブシの奇形の実もぶら下がりながら細胞分裂中。薄闇の中、ガクアジサイが青白く光っている。キノコとパンは、親戚だと昨日読んだキノコの本に書いてあった。理由は、キノコは菌類、酵母もある種の菌を培養させて作るから。そして、僕のパンは、パンになってからも育つ。

森の中で出会つてラッキーマもの一つに「フェアリーリング」っていうのがある。キノコが何かの周りを一定の間隔を保ちながら並んで輪を描く。その何かは、立ち木であったり、朽ちた切り株であったり、動物の死骸だったり、何かの痕跡がなかったりもする。僕も妖精みたいにベーグルを輪っか状に並べてみよう。

二十四個のベーグルを入れていた紙袋は空っぽになった。森にぶら下がっているベーグルの一つがゆらゆらと揺れている。その揺れが一瞬大きくなつて、空中プランコの飛び移りみたいにベーグルは枝から跳躍してドロドロの水溜まりの中にびたつと着地した。僕は、慌てて水溜まりに落ちたベーグルに駆け寄つて救い上げようとした。だけど、粘着質の泥のせいでベーグルが持ち上がらない。ゆっくりと泥の中に沈んでいくベーグルを見つめていたら、ベーグルの穴から沼がどんどん出てきてベーグルの穴を広げていく。気が付けば、ベーグルの穴を見ている僕自身の足元も沼の中。